

---

# 東方殺鬼伝【蒼き瞳が視るモノ】

愛猫家の次男

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方殺鬼伝【蒼き瞳が視るモノ】

### 【Nコード】

N0773Y

### 【作者名】

愛猫家の次男

### 【あらすじ】

何の前触れも無く、その力を手に入れてしまった少年『西園寺詩喜』。彼は命かながら自らを殺しに来た者達から逃げていた、しかし済んでの所で崖から転落してしまう。『これで終わる 全部』しかし、彼は流れ着く。あらゆるものを受け入れる理想の郷

『幻想郷』へと

## プロローグ

”死、

死とは命がなくなること・なくなった状態、生命活動が止まること・止まった状態、あるいは滅ぶこと・滅んだ状態のこと。人間の死の定義は文化圏、時代、分野などにより様々である

近年では「不可逆的」という概念が加えられることもある

一時的に命が無い状態になったが再び生の状態に戻った場合、途中の死の状態を「仮死」や「仮死状態」という。伝統的には宗教、哲学、神学が死を扱ってきた。近年では、死生学、法学、法医学、生物学等々も死に関係している。死の後ろに様々な言葉をつなげ、様々なニュアンスを表現している。例えば「死亡」「死去」「死没」などがある。組織の滅亡や、そのものがもつ本来の機能が失われることも「死」と表現することもある

死には様々な種類がある

人間や動物のような生物は、外傷・疾患・老衰、事故死・自殺・他殺といった多くの原因が挙げられるだろう

生物の”死、即ち『命』そのものが朽ち果て、滅ぶ事にある

逆に、金属などの人工物もしくは命を持たない物質には『死』はあると言えようか

答えは『YES』だ

この世総ての物質　それこそ万物全てに『死』は存在する

形は違えどモノの行き着く先は『滅び』である

故に人は死を恐れる

ならば『死』いうモノに形はあるのだろうか

答えは『YES』だ

しかしその形を見る者は普通と言えないだろう  
言葉では表せる『死』という概念。しかし其れに実体など無く不可  
視な存在

そしてもしも、死そのものを視覚的に感知できるとすれば、その者  
は決して普通ではないだろう

他者に知られることもなく、理解されず、異端視され、見捨てられ、  
恐れられ

故に孤独となり絶望することだろう

”世界はこんなにも脆く壊れやすい、

のだと

太陽が沈みきり、深遠の闇たる夜が支配する森の中

「はあ　　！　はあ　　！　っ、はあ　　！」

青白く染まった表情をした一人の少年が木々の間を走り抜けていく背中まで無造作に伸ばした黒髪、歳は17・8程度と推定できる少年は、歳相応のシャツとジーンズに身を包んでいる。しかし彼の姿は10人中10人が目を見開き、表情を凍らせるだろう

服装は傷でボロボロに裂かれ、裂けた隙間からは赤々とした鮮血を流し、そしてそれ以上に　　彼の衣服は血液で赤く染まっていた深い傷を負った左腕の肩を右手で押さえており、指の隙間から血が溢れていく

更に少年の手には刃渡り20cmほどの和式型のナイフが握られ、その刃は大量の血で赤く汚れていた

「（くそ　　くそっ　　！）」

走り続ける少年は、幾度となく、何度もそう頭の中で呟く

やがて走り疲れた少年は一本の木に重い腰を下ろす

「っ！！」

ドスン

彼の振り下ろした拳が地面に微かな凹みを作る

「（何で　　何で　　こんな事につ！）」

少年は今にも泣き出しそうになる顔をしながら握り締めるナイフへ

視線を向ける

彼、『西園寺<sup>さいおんじ</sup>詩喜<sup>しき</sup>』は人を殺めた。それも一人や二人ではない。  
何十            それこそ100人に達する程、彼は多くの人間を殺めた  
のだ

だが決して、それは自己満足で殺戮を行った訳ではない

彼は殺めた人間全てに命を狙われていた

彼は元々は平凡な人生を歩んでいた一人に過ぎなかった。しかし『  
とある事故』を境に彼は『目覚めてしまった』のだ

「つぐあア！」

少年は突然、頭痛に顔を歪め、俯き、痛みが引くと同時に頭を持ち  
上げる

しかし持ち上がった彼の瞳は異常なモノへと変化していた

茶色だった瞳の虹彩は蒼色に発光し、瞳孔は垂直のスリット状へ変  
形している

有り得ない

端から見れば、その瞳は有り得なく、神秘的であり            同時に禍  
々しいモノだった

そして彼が命を狙われていた理由でもある

『直死の魔眼』 彼を追っていた者達は皆そう言った

その眼を覚醒させてから6年間。彼の視界には『死』そのものが広がっていた

やがて周りの人々は彼から離れていき、少年は12歳という若さで孤独となり、生きてきた。残飯を漁り、雨風を通さない公園の公衆トイレなどで寝泊まりをし、生きてきた

「ハア ハア うっ」

息を整える内に、涙腺から溢れ出す涙。何故、こんな事になってしまったのか。どうして自分がこんな目に遭わなければならぬのだろうか  
彼は何度もそう考えた

「つちだ！」

「させ！」

「!？」

微かに聞こえた声。少年はガバリと立ち上がる

追いつかれたっ！

そう頭を過ぎった瞬間、彼の脚は声とは逆のほうへと駆けていた  
逃げなければ、そうしなければ殺される



殺される 何も分からぬまま

殺される 誰にも知られぬまま

殺される 殺される コロサレル！！

嫌だ！

彼は走り続ける。当ても無く ただ我武者羅に

いったいどれだけの間、走り続けただろう

もはや体力も底を尽き、視界が朦朧としていく

ふと、彼の足取りはある崖の前で止まる

視界が朦朧とするせいか、はたまた夜のせいか。崖下の麓は捉えられず、ただただ風の音が吹き荒れていた

（行き止まり　か）

後ろを振り返ると、まるで何かを探すかのように無数の光が辺りを照らしている

もはや逃げ道は無い。少年はナイフを構え、迫り来る恐怖を睨みつける

「  
」

が、彼は直ぐに構えを解いてしまう

「ハ　ハハ」

やがて、口元が釣り上がり、乾いたような笑い声が漏れる

「ハハハハハ」

（なんで俺　こんな必死になってんだ？）

もはや自分の事さえ理解できない。何もそこまで足掻く事はないのではないか　生き続ける事に意味なんて無いのではないだろうか。そんな事が頭を過ぎった瞬間、彼は感情を無くしたかのように空を見上げ呟いた

「くそつたれが  
」  
咳いたと同時に足元の岩場が崩れ、重力の働くままその傷ついた少年の体は真つ逆さまに落下していく

(これで終わるんだ 全部)

絶望から介抱されたかのように、安らかな表情で瞳を閉じる

「いいえ、終わらないわ。これから始まるのよ」  
そんな女性の呟きは彼には届かず、その意識は闇へと肉体と共に落ちていく  
その姿を見つめる無数の目玉と、幻想的な衣服に身を包み込み、日傘と扇で表情の大半を隠した女性を残して

「やれやれ、すっかり遅くなってしまったな」  
ある林道で女性が咳いていた。彼女の名は『上白沢<sup>かみしろさわ</sup> 慧音<sup>けいね</sup>』 やや和風な衣装と変わった帽子、青白い長髪が特徴的な美しい女性  
時は夕暮れ、ある場所へ行った帰り。予定より長居しすぎた彼女は、走る事は無いが足早に林の中を抜けていく

「早くもどらないと ん？」

ふと、視界に入ったモノに疑問を持ち、慧音の脚が止まる

「あれは っ人か!？」

遠目から目を凝らし、それが人間だと察した彼女はその人物へと駆け寄った

「おい、大丈夫か! しっかりしろ!」

駆け寄ると同時に、微かだが彼女の目が見開く  
その人物は全身に深い傷を負い、今にも事切れそうなほどの虫の息だった

(まだ子供じゃないかっ)

伸びきった黒髪を掻き分け、それがまだ二十歳にみたくない少年だと

確認すると、慣れた手つきで応急処置を施していく

「しかし」

少年の傷を見ていく内に彼女は疑問に思う

少年の傷は、獣や彼女が知る『存在』達が与えそうな傷では無く。何か特殊な力が加えられたかのような違和感を放っている

「一体誰がこんな？これは」

すると彼女は近くに落ちていた一本のナイフを手を取った

見惚れるほど美しい銀色の刃が夕日の光を反射するように煌めいている。そしてその持ち主が目の前の少年である事が、彼の腰に差さっていた鞘とナイフの柄が同じ色事から分かった

「今は考えるのは止そう」

ある程度の応急処置を終え、慎重に彼を担ぎ、再び林の中を歩いていった

来るなっバケモノ!!

消えろ!

死んじゃえ!

多くの人間が俺を罵倒していく

(やめろっ 俺をそんな眼でみるな!)

お前など生まれなければ良かったのに!

(もう聞きたくない!)

消えろ!

消えろ!

(やめてくれっ)

消えてしまえ!!

「やめろオオオオオオオ!!」  
無意識に体が飛び上がる

「ハアツ! ハアツ! ハアツ!」  
ダラダラと流れる汗を拭うと、不意に疑問が過ぎる

(ここは 何処だ?)  
俺は確か『アイツ等』から逃げ続けて、そして

(崖から落ちたはず)  
なら何で生きているんだ。死に底なつたのか  
辺りを見渡すと、和風の一室。障子や襖で囲まれ、空間が完全に断  
絶されているとも、いないともいえる曖昧でおぼろげさを醸し出し  
ていて、東洋的な幽玄な明かりを空間にもたらしている

(誰かの家 なのか?)  
とりあえず寝かされていた布団から起き上がる。 布団で寝る  
なんて何年ぶりだろう  
ふと、自分の身形が変化している事に気付く。シャツとジーンズの  
変わりに浴衣のような和服。そして体には包帯が巻かれていた

(治療 してくれたのか)

そう考えていると、閉じた襖の向こうから足音と人の気配を感じ取り、無意識に後腰に手を伸ばすが

(っ!?!? 無い?!?)

驚愕と同時に襖が開く

「つく!」

拳を硬く握り締め、現れた人物へと一気に飛び掛り、その胸倉を掴むと勢いのままその人物を壁に叩きつける

「きゃっ!」

(女!?)

だが警戒を解くわけにも行かず、そのまま現れた女の首に腕を押し付け固定する

「誰だ! 俺をどうするつもりだ!」

自分でも混乱している事は分かっている。今まで何度も味わってきた恐怖からだろう、体が本能的に他者を敵と判断し攻撃的になってしまうようになっていた

「がっ かはっ!」

女は苦しそうに咳き込み、片目を俺へと向ける

その眼はどこか優しく、不思議な温かさを感じさせる。だがそれが余計に俺の心を蝕む

なぜそんな眼で俺を見る!

「お前は (バキヤ)っ!?!」

女へと問いかけようとした瞬間。頭部に重い衝撃を受け、体が吹き



飛ぶ

「ぐはアッ！」

まるで自動車に跳ね飛ばされるような衝撃、勢いのまま壁へと叩きつけられ肺の中が詰まり、一瞬だけ呼吸が止まった

「ガハッ！ ゴホッ！」

何事かと顔を持ち上げると、先ほどの女の前に白い髪を伸ばし、紅いリボンともんぺを穿いた女が、突き刺すような殺気と共に俺を睨んでいた

「お前、よくも慧音を！」

そう言うのと両手から炎を発生させた

（っ！ コイツ『アイツ等』と似たような なら敵か！）

一瞬だけ視界を回し、武器になるようなものを探す。と、すぐ隣の机のフルーツバスケットの中にあつた果物ナイフを掴み引き抜く

「そんなモンで私に敵うとも思ってるのか！」

炎を持った女が手中の炎弾を振りかぶり、俺もまたナイフを逆手に脚に力を加え、駆けようとした瞬間。静止させる声が響く

「やめる二人とも！！」

「！！？」

声を挙げたのは、先ほどもんぺを穿いた女に『慧音』と呼ばれた女だった

「何で止めるんだ、こいつはお前をっ！！」

「いいから落ち着け、妹紅！」  
『妹紅』と呼ばれた女は、苦虫を噛み潰すかのごとく齒軋りを鳴らし炎を消す

「君も、ソレを降ろしてくれないか？」  
そう言っただけに微笑む長身の女

「断る」  
そう言っただけに同時にもんぺの女が掴みかかるようにするが、長身の女がソレを止める

「こちらに君と敵対する気はないんだ」

「信じられるか、そんな言葉」  
そうだ、そうやって俺に近寄ってきた奴らは皆俺を裏切ったんだ

「君に何があったか分からないが、どうか落ち着いてくれないか？」  
そう言いながらこちらに歩み寄る女

「来るな！」

「おい慧音！？」

何なんだこの女。こっちは仮にもナイフを持ってるんだぞ！

「私は君と話がしたいだけなんだ」

「来るなっ 俺に近寄るな！！」

「慧音！」

何だ。なんで俺は震えてるんだ！？　こんな女、俺の『力』があれば感嘆に殺せるはずなのに！

「どうか話を聴いてくれないか？」

そう微笑む女の顔が、まるで昔に見た『誰か』と重なり、強烈な頭痛が俺を襲う

「がっ　アアツアアアアアア！！」

視界が赤く染まる

「っ！　大丈夫か！」

そして世界に『死』が満ちる

「離れる慧音！　様子がおかしい！」

「アアアッグウウウウア」

やがて俯いていた頭を挙げ、二人の女を『視る』

「『！！？』」

二人の表情が驚愕の色に染まる。当たり前だ　　こんな『眼』誰だって気味悪がるさ

「俺　っに　関わるなッ」

足取りが悪くなり、姿勢が安定しない

くそっ　　頭が割れそうだ

意識が　　朦朧と

「うっ

」

「気がついたか？」

再び布団の中で眼が覚める。また意識を失っていたようだ  
そしてすぐ横に長身の女と、少し離れた柱にもんぺの女が居た

「ふん、気を失ってる間に殺せば良いものを」

嘲笑うように呟く

「そんな事はしない、仮にも怪我人だ」

何なんだコイツは、馬鹿なのか？ それとも天然なのか？

「む、なんだその眼は」

「別に」  
そう言うと視線を天井へ向ける。いつもの『点』と『線』が見えない。気を失った時に解けたのか

「一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「さっきの『蒼い眼』は一体なんだ？」

蒼い眼 おそらく『アレ』ことだろうが

「さあな、俺にも良く分かってない。ただ俺を殺しに来た奴らは『コレ』を『直死の魔眼』と呼んでいた」

「直死の魔眼？」

「ああ 俺は何だつて殺せる化け物だ」  
そう言つともんぺの女が「ハン」と嘲笑する

「何でも殺せるだつて？ 寝言は寝てから言うんだな」

「妹紅！」

「フン、俺の殺しに来た自称『不老不死』の死徒どもも同じようなこと言つてたっけな」

苦笑しながら俺は『直死の魔眼』を発動する

その瞬間、部屋、二人の女、ありとあらゆる場所に禍々しい『点』と『線』が張り巡らされる

「「!!」」

その禍々しい魔眼を目にした二人の表情が強張る。特にもんぺの女は『不老不死』という単語が出てきたときから表情が固まっていた

「お前がどういう『存在』かは知らないが、俺にはお前の『死』が手に取るように見えるぞ？」

「!？」

たしかに他の『不老不死（笑）』よりも線が細く、点の大きさも小さい上に少ない。だが確かに『死』がそこにあつた

「お前 何者だ？」

もんぺの女の質問に、俺は苦笑しながら答えた

「ただの『殺人鬼』さ」

## プロローグ（後書き）

どうも、up主の『愛猫家の次男』です。ある日突然、『幻想郷に直死の魔眼使いが幻想入りしたらおもしろいんじゃない？』と友人達と話していたので上げてみました。低レベルな考えですいませんm

（――）m

そういう考えに至ったのは、もともと好きだった『空の境界』を視ていて『やっぱ直死の魔眼かっけえ〜』と思い、不意に東方の同人アニメ『幻想万華鏡』を思い出し、『直死の魔眼で弾幕斬りまくったらかっこいくね？』と思ったのが始まりです

こんな低レベル思考な作者ですが、よろしく願いします

ちなみにこの作品のイメージOPが『凜として咲く花の如く』だったり

フランドール戦の時に『咲いて〜咲いて〜クルリと回り』を『裂いて〜裂いて〜狂りと廻り』と変換するとかっこいくおもえてwww

第一話『殺人鬼』（前書き）

ようやく投稿できる時間が作れた



## 第一話『殺人鬼』

「  
」  
何をしてもなく、ただ空を見上げていた

「幻想郷      ねえ」

ポツリと呟く。長身の女『上白沢 慧音』曰く、ここは幻想郷と呼ばれ、人から人外、妖怪や神々が住まう理想の郷

日本      いや、世界中にそんな名前の土地は聞いたことが無い。なんでも結界やら境界やらで『向こう側』から丸ごと切り離しているらしい

正直、そんな事はどうでもいい。問題は何故俺がここに居るのか、という事だ

あの崖が通路になっていた      なんて都合がいい話があるはずも無く。謎が深まるばかり

幻想郷では俺のような外の世界から来た人間を『外来人』と呼んでいるらしい

その後、何かを思いついた様子の上白沢は「少し出てくる」と言っ  
て何処かへ言っってしまった。もんぺの女『藤原 妹紅』もまた「あ  
まりうるちよろするなよ」と言い捨てて出て行っただけ

（解らない事だらけだ）

一つ深い溜め息を吐き畳の上に寝そべる。静かな空間に涼しい微風  
が吹き気持ちがいい

今は解らない事が多い

だが、一つだけ解る

(俺は まだ生きている)  
はたして喜ぶべきなのか、哀しむべきなのかは解らない。ただ、ど  
うにでもなる気がしてやまない  
そう思いつつ瞼を閉じ、意識を闇の中へとた溶かした

慧音 s i d e

(殺人鬼 )

彼、西園寺 詩喜という少年は自らをそう言い捨てた。その時の彼の表情は、まるで自分を嘲笑うように  
そうしていた  
そして何処か、悲しそ

たしかに、彼の話聞く限りは彼が多くの人間を多く殺害してきたのだらう。だがそれ以上に彼は傷付いていたと思う。12という若さで孤独になり、記憶に無い異質な力を持つが故に異端視され、拳

句の果てには命まで狙われている

ギリッ

思わず歯軋りを鳴らす

腹が立つ。まだ年端もいかない子供に寄ってたかつて『危険だから』  
『異質だから』というだけで全てを奪った彼の周りに対して、そして何より、彼の両親に対して

お前なんか生まれてこなければよかった！

そう吐き捨てていったらしい

何故そんな事が平然とできる！？

ガッ！

近くにあった木を、八つ当たりするように殴りつける。微かに痛むがどうでもいい

( ) とにかく、今は急ぐ。きつと『彼女』なら知っているはずだ

前を向き、目的地である東へと私は歩を進めた

s i d e o u t

妹紅side

「はあ〜」

行く当ても無く、ぶらぶらと『迷いの竹林』の中を歩きながら重い溜め息を吐いた

原因はもちろんあの男『西園寺 詩喜』。怪我をしていたところを慧音が助けたかと思えば、その慧音に掴みかかった。ただの人間のクセにナイフ一本で私に立ち向かおうとした

イライラする

なによりアイツの『眼』を視たときに少しだけ『怖い』と思ってしまった事が一番腹立たしかった。ただの人間なハズなのに、私はアイツに対して『死』という恐怖を感じたのだ

死なないはずであるこの私だ

しかもアイツの眼、たしか『直死の魔眼』とやらには私の『死』が

見えるらしい。ありえない、死なない私に『死』があるはずがない  
しかし否定できない自分がいた。アイツの言葉に嘘はないと感じた  
『死』が見える　　一見パツとしないその表現。一体どんな風に  
アイツには見えているのだろうか

side out

詩喜 side

異変に気付いたのは数分前、仮眠から眼を覚ました後だった

(随分外が騒がしいな)

祭りでもあるのかと思いつながら茶の間で寛いでいると、一人の子供

が飛び込んできた

「慧音先生、大変!」

飛び込んでくると同時に、俺と目が合い子供の動きが止まる

「上白沢なら留守だ」

ズズツとお茶を飲みながらそう言うと、子供の表情が絶望に染まるかのごとく青くなる

「そ、そんな」

「どうかしたのか?」

決して視線は向けず、問い掛ける

「大変なの、妖怪が 妖怪が攻めてきたの!」

何?

子供の言葉に疑問を浮かべる。たしかつこの人里は上白沢の『歴史を食べる程度の能力』とかいう意味不明な力とやら妖怪の賢者やらの力で守られているはずでは?

「妹紅の 妹紅のお姉ちゃんは!」

「留守だ」

「そんな、どつどつし ひっぐ よう」  
「う」  
ポロポロと泣き崩れる子供。良く見ると体の所々に引っかかれたよ  
うな傷跡があり、紅い雫が垂れていた

「  
」  
俺は卓袱台の上に置かれている一本の和式ナイフへと視線を向ける

「案内しろ」

「ひっぐ  
え？」

こんな事、俺のガラじゃないが上白沢には一応借りがある

「妖怪どもの場所に案内しろ」

「ど、どうするの？」

鞘に包まれたナイフを和服の後ろ帯に差す

「俺がソイツらを殺してやる」

s i d e o u t

No side

「ギャハハハハハ!!」

人々が逃げ惑う姿を見ながら、その異型は醜い笑い声を上げていた。体長2mを越え、獣のような顔と鉤爪をぎらつかせている。

「それにしてもいいのかよ。人里を襲ったりなんかしてよオ」

その隣に居る巨大な棍棒を持った鬼にも似た姿の妖怪が口元を歪めながら建物を破壊していく。

「イイノイイノ、今はあのウザってえ賢者も死ナナイ小娘も居ネエからよ」

さらにその後ろには、腕が4本もある骸骨的な妖怪がカタカタと笑う。



「お前ら、久々のご馳走だからって調子にのんなよ？」

「テメエにだけは言われたかねえぜ」

「違えネエ」

「「「ギャハハハハハ！」「」」

そんな3体の妖怪を前に、非力な人々は逃げる事しかできなかつた

「あうっ！」

そして逃げている最中、足元を掬われ一人の少女が転倒してしまう

「おう？ 新鮮なガキ発けくん」

「ひっ」

獣顔の妖怪が少女へと近寄り、その大きな手を伸ばすが、途中でそれを止める

「あ？ どうかしたか？」

それを見ていた2体の溶解が話しかける

「いや、なんか変な人間の臭いがする」

「はあ？」

やがて周りに静寂が訪れ、その音が聴こえる

ザッ                    ザッ                    ザッ

「おい、アレ」

骸骨の妖怪が砂塵の向こうを指差す

ザッ                    ザッ                    ザッ

それは人影だった。ゆっくりと妖怪達の方へと歩み寄ってくるその姿は和服に身を包み、左手には怪しく光る一本のナイフを斜め下に構えている

そして

「お前らか？ 俺の獲物は」  
まるで悪魔のような笑みを浮かべた蒼き瞳の『殺人鬼』がそこに居た

「なんだアテメエ」

やや拍子抜けしたように棍棒を持った鬼の妖怪が問い掛ける

「今から死ぬお前らに言う意味は無い」

その少年の言葉に怒りを覚えた鬼の妖怪が少年へと襲い掛かる

「このガキヤアアアアアア！」

丸太のような太さの棍棒から繰り出される叩きつけ。その一撃は地面を抉り、その凄まじさを知らしめる。人間が受ければひとたまりも無い

その光景を見ていた少女はあまりの出来事に口元を押さえ、妖怪たちは少年の無様な死を嘲笑う

「遅いな」

砂煙が晴れると同時に、不敵な笑みを浮かべ、棍棒を避けた姿勢のまま呟いた

「なっ！？」

「！！？」

その場にいた全員が驚愕する

「ちい！」

鬼の妖怪は棍棒を抜くことなくめり込んだ地面もろとも薙ぎ払う、しかしそれよりも速く少年は棍棒を踏み台のようにし、鬼の妖怪を飛び越える

そして振り返ることなく歩を進め、残りの2体へと接近する

「くっ！」

骸骨の妖怪が、四本の腕に持つ骨の剣で凄まじい数の斬撃を放つ。しかしそれは彼の持った一本のナイフでいなされてしまい、ほんの一瞬の隙に蹴りを放たれ、その体が吹き飛ぶ

「う、ウヲオオオオオ！！」

残った獣顔の妖怪が、咆哮をあげながらその鋭い鉤爪を突きつける。しかしそれもまた、糸を縫うような動作であっさりとかわされてし

まう

あまりの事に、攻撃をかわされた妖怪たちが動きを止めている隙に、少年は倒れている少女へと歩み寄る

「怪我はないな」

少年の冷気を感じる問い掛けに、少女は怯えながらも頷く

「ならサツサと逃げろ、邪魔だ」

少女はすぐに立ち上がり、駆け足で逃げていく

「さて、死合つとしよう。妖怪諸君」

少年 『西園寺 詩喜』 ゆっくりと振り返り、再び笑みを浮かべた

「ハア！ ハア！ ハア！」  
その女性『上白沢 慧音』は走っていた。目的地を後にしてすぐ、傷だらけで人里の住人が駆けつけてきたのだ。妖怪が里を襲っているという報告を持って

（やられたっ！ まさか私と妹紅の留守を狙って来るなど！！）

「慧音！」

走る慧音の隣を、追いついてきた妹紅が走る

「妹紅！？ どうして」

「人里の連中が知らせに来たんだ！ 急ごう！」

「あ、ああ！」

走る中、慧音は一人の少年の姿を思い浮かべる

(西園寺っ)

無事で居てくれ！)

「慧音先生!!」

数分後、慧音たちの前に人だかりが出来ており二人の存在に気付いた子供たちが駆け寄る

「皆、無事だったか!」

慧音は安堵の息を吐きながら子供達を抱きしめる

「うん、でも!」

一人の少女、先ほど詩喜に助けられた少女が焦りながら事情を説明する

「なに！？ それは本当か！？」

慧音は事情を聞くと、妹紅と視線を合わせ、妹紅は無言で頷く

「分かった、後の事は私達が何とかする。皆は安全な所へ避難して  
いてくれ！」

慧音と妹紅は詩喜が居るであろう場所へと駆けて行った



「こ、これは!？」

その惨状に、思わず眼を見開く慧音

そこは辺り一面が真っ赤に染まっていた  
噎せ返るような異臭に鼻を仰ぐ

「ギャアアアアアア!！」

「!？」

やや距離の離れた場所から断末魔が響き渡る

「妹紅!」

「分かつてる!」

すぐさま二人は断末魔が聴こえた方向へと向った

そして、二人はたった一人の少年によって描かれた地獄絵図を目の当たりにする

地の池に佇む少年。身に纏う和服も、顔や腕、持っているナイフには夥しいほどの血がついていた

「遅かったな」

血を気にするでもなく、その少年はナイフの血を拭き取り鞘に収める

「お前がやったのか？」

「ああ」

妹紅の問いに、無表情で答える

「服、汚れたが悪いな。後処理は任せた」

「じゃあな」と言い残し、彼はズカズカと帰っていった

「待て！」

そんな詩言の後姿を止め、慧音は小さく問い掛ける

「なんで、お前は平然としてられる？」

その問いに、彼は答えた。さも当たり前のように、そうであるように、そして　その瞳の奥にある悲しみを隠して

「俺が　ただの殺人鬼だからさ」

第一話『殺人鬼』（後書き）

キャラの口調が良く分かりません

∴∴

## プロフィール

名前：西園寺 詩喜

読み：さいおんじ しき

種族：人間

性別：男性

能力：『直死の魔眼』『?????』

身長：176cm

体重：54kg

詳細：今作の主人公。『ある事件』により死に掛けた経験から『直死の魔眼』を覚醒させる

12という若さで両親から捨てられ、その後一時的にある場所に居たが、その後彼の能力を恐れた者達に命を狙われ逃亡。その後は至る所を転々としていたが、ついに追い詰められ崖から転落。しかし何者かの手により『幻想郷』へと流れ着き、倒れていた所を人里に住まう『上白沢 慧音』に保護される

性格は無愛想で攻撃的。自分に害が及ぶもの全てに刃を向ける。幼い頃から周りから異端視されてきたが故に他者からの優しさをあまり受けた事が無く、素直に受け取ることができない

自分自身を『化け物』もしくは『ただの殺人鬼』と称し、やや自己犠牲な行動を行う事がある

身体能力が常人のソレとは比べ物にならないほどにかけ離れており、反射神経なども常人を上回っている。戦闘スタイルはナイフや刀といった刃物を使った機動性重視の戦いをする。しかし周りからは良く『獣の様な動き』と呼ばれている

彼の持つ『直死の魔眼』は、その知識を持つ者達からも見て異形で

『魔眼の変異体』とも思われているが、詳細は不明。ただ本人曰く『不老不死の死も視える』とのこと

体付きは細く、すらつとした体型だが、多くの修羅場を潜ってきたためしつかりとした筋肉をしており非力ではない。顔立ちが良いものの、殆どが頭髪に隠れている。本人は気にしていない

鳩尾に刃物で差されたような傷跡があるが、彼はあまりその事について喋ろうとはしない

> i 3 4 0 7 5 — 4 3 0 6 <

西園寺 詩喜の容姿絵

## プロフィール（後書き）

能力についてはまだ覚醒前  
ない  
なんですが、いい能力が思いつか

誰か  
！  
ワタシヲタスケテ  
！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0773y/>

---

東方殺鬼伝【蒼き瞳が視るモノ】

2011年11月16日01時27分発行